

22 世紀八幡ルネッサンス運動（略称：八幡ルネ）企画作業チームニュース

ひ る ば

目的

八幡市民の幸福の増進のために活動する。古い歴史を有する八幡の秀でた伝統を継承し、八幡市民の総意と英知を結集して活動する。町の隅々にわたり高い関心を払い、たくましい意志と情熱を貫いた粘り強い行動で、光とうるおいある生活と文化を享受するように努める。

■発行：22 世紀八幡ルネッサンス運動
企画作業チーム ひろば編集部
■事務所：八幡市八幡高畑 10-76
TEL/FAX075-981-6505
090-3710-4842
■橋本連絡所：八幡市橋本興正 7-4 075-971-9488
■男山連絡所：八幡市男山指月1-12 080-3780-6140
■八幡連絡所：八幡市八幡土井135 竹島文化2F13号
080-3775-8133
■振込口座：京都中央信用金庫八幡支店
普通 5243582
22 世紀八幡ルネッサンス運動

地球温暖化と人類の滅亡（3）

中村たかし

気象庁などの科学的知見では、地球温暖化の影響による日本の自然環境の変化は確実に進行していく。その進捗は今後の温室効果ガス排出量により変わるが、現在の対策レベルが続いた場合（4℃上昇シナリオなどに近い将来像）の予測をまとめる。

（現在～2030 年代）

最高気温が 35℃を超える猛暑日の年間日数が増加。酷暑と共に「長期の夏」が定着。短時間で局地的に降る「激しい雨（1 時間に 50mm 以上）」の発生回数が増加。都市部での内水氾濫、河川の増水、土砂災害のリスクが高まる。コメは高温により品質が低下する「白未熟粒」が西日本を中心に増加。果樹は栽培に適した地域が徐々に北上。日本近海の海水温上昇でブリなど暖かい海を好む魚の漁獲域が北上し、サンマやサケの不漁がより深刻になる。

（2040 年代～2050 年代）

気候変化が社会経済基盤を揺るがし始める。「危険な暑さ」が日常になり猛暑日の年間日数は最大約 18 日程度増加する。夏のほとんどが真夏日となる。夜間の気温が 25℃を下回らない熱帯夜も最大で約 38 日増加する。

1 時間に 50mm 以上の大雨の発生回数が、20 世紀末比で全国平均で 2 倍以上に増加し線状降水帯の発生頻度や強度が増す。

大規模な河川の氾濫や、深刻な土砂災害が全国で頻発。日本海側など多くの地域で積雪量が大幅に減少。ウィンター産業は壊滅的な打撃を受ける。海面水位の上昇が続き、砂浜の侵食が進む。満潮時の潮位が高くなり、台風時には高潮による沿岸部での浸水被害のリスクが増大。海拔の低い「ゼロメートル地帯」を抱える大都市圏（東京、名古屋、大阪）は深刻な脅威に直面。

（2060 年代～）

気温の上昇はさらに進み、日本の年平均気温は最大で 4.5℃上昇するシナリオもある。これは、北海道が現在の本州のような気候になり、西日本では亜熱帯化がさらに進む可能性がある。高温や豪雨、干ばつの影響で、作物の生産が不安定になる。2060 年代には、東北以南でコメの収量が平均で 8～18% 減少するという予測もある。海水温の上昇と海洋酸性化が進み、魚介類の生息域が激変。日本の漁業は根本的な構造転換を迫られる。これまで日本にいなかった病害虫や外来種の侵入・定着も進み、在来種を脅かす可能性が強い。

八幡c-r-i-p 稲刈り記

入江まり子

10 月 30 日、八幡c-r-i-p（クリップ）2 年目の稲刈りをしました。昨年より広くなり、15 m × 20 m の広さ。数日前からの大雨で、田んぼは水田状態です。前日に田んぼの水流しと周りの草刈りをして、休憩場所をつ

くりました。幼児さんのいる参加希望の方には、お勧めできませんとお伝えしました。当日は昨年から主力で頑張ってくれている小6と高2のWさん姉妹とママ。初めて参加の大学1年のSさん親子、子どもの頃、田んぼ経験があるというTさん、そしてFさん夫妻と小3のお孫とー夫妻の11名でスタート。田んぼは、田植え期ほどのぬかるみ

ではないものの、じつと立っていると足が抜きにくくなる所もある。皆さんに説明をして、水のひいてるところから作業を始める。こんな田んぼの稲刈りは初めて！田んぼには、ジャンボタニシ君の殻があちこちに転がっています。稲はこの時期だというのにまだ青々しているところがあり、軸も生き生き太く、刈るのに力が要ります。一引きでは刈れない稲です。悪銭苦闘

の稲刈りが展開です。稲を刈る人、藁で束ねて括る人、運ぶ人、稲架かけをする人、できる持ち場でそれぞれ頑張る、一服して軌道に乗り出すと、近所のSさんが息子さんとお孫さんを連れて応援参加。おしゃべりも弾み、立ち止まり休みながら、にぎやかに仕事は進みます。お昼になり上がってもらうと、皆さんドロドロ。それでも、皆さんニコニコ笑顔。

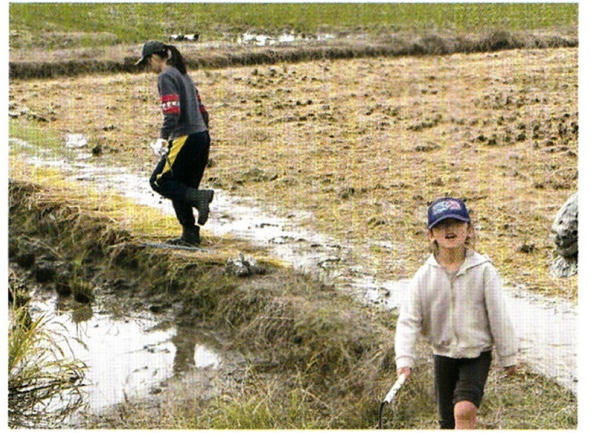
田んぼのわきのたわわと実る柿の木の柿を袋いっぱい詰めて、畦に生える葎も土産に持って帰ってもらい、終えました。「貴重な経験しました」「久しぶりに土に触って楽しかった」「力エール5匹捕まえた」。

翌日には、3人で残りの稲を刈り取り、稲架にかけ切りました。

気温が下がる時期にこそ熟成するお米！楽しみです。

私たちは、田園風景を守り、体にも環境にも優しい農業・お米づくりの在り方を自ら体験することで、考え広げていきたいと考えています。





大谷川清掃レポート

2025・11・28

ゴーヤ

ゴーヤ(ゴーヤー)は、ウリ科に属するツル性の植物です。インドを中心とする東南アジアあたりの熱帯アジアが原産地です。沖縄では「ゴーヤー」と呼ばれています。沖縄以外では、「ゴーヤ」と呼ばれるのが一般的のようです。標準和名は「ツルレイシ」、農学・園芸学では「ツルレイシ」、生物学では「ニガウリ」と呼ばれているようです。

ゴーヤには、タネから育てるか、苗から育てるかの選択肢があります。ゴーヤは、連作に弱い植物です。そのため、同じウリ科で連作に強いカボチャが台木に使われます。タネから育てるよりも連作障害に強いことが理由です。

現代農業では、連作障害についての原因はいろいろな仮説があります。病原菌や害虫、連作によつての、植物に必要な微量元素の不足などが指摘されています。しかし、真の原因は解明されていないのが現状です。現在は、接ぎ木による対策が支持されています。

雌雄同株(しゆうどうしゆ)はウリ科の植物の特徴の一つですが、植物としてはめずらしいものではありません。マツやスギ、クリなど、意外と多くの植物がこの性質をもっています。雌雄同株とは同じ株のなかに、雄花、雌花が存在することです。植物が花を咲かせるのはタネを残すためです。多くの植物は一つの花の中に雄蕊と雌蕊を持っています。ゴーヤは、わざわざ雄花と雌花を持



つのででしょうか。それは、自家受粉を避けて、いろいろな性質をもった様々な環境の中でも、生き延びる子孫を残すための方策なのです。

春からゴーヤを栽培していると、やがて花を咲かせますが、雄花ばかり咲いて雌花はすぐに咲きません。株が若いうちは実をつけるほどの栄養的余裕がないからです。立派な株に育てば、そのあと多くの果実をつくり、多くの子孫を残すことができます。若い株が雌花を咲かせて実をつくるのは、望ましいことではないのです。

ゴーヤは「ニガウリ」とも呼ばれます。漢字では「苦瓜」です。果実が熟すまでは苦みを持っています。それまでは動物に食べられないように、苦みでタネを守っているといえます。

◆11月2日、第117回舞台・盛戸大谷川清掃は、2名の参加で土嚢袋換算18袋回収しました。

◆11月23日、第200回山路大谷川清掃は、5名の参加で土嚢袋換算96袋回収しました。

【第201回山路大谷川の清掃のご案内】

■日時：2025年12月28日(日)

■午前8時半～11時(雨天中止)

■集合：旧あずま屋

(コノミヤ裏八幡源氏垣外)

※会場設営にご協力いただける方は、集合時刻の30分～1時間前に現地にお集りください。

※用意して頂く物：厚手の手袋。その他の必要な物は用意します。

《主催》NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会

連絡先：八幡市八幡高畑10・76

Tel 075(981) 6505

携帯090・3710・4842

FROM・ロード&ストリート
VOL.52 2025・11・28

「やがて戦争の激化とともに
ごみ収集はほとんど行われなくなった」
梅川由紀著『ごみと暮らしの社会学』
から

八幡ルネが市街地の清掃活動で拾うゴミの種類は、吸い殻や紙切れが多い。このところ、ペットボトルやスチール缶は少なくなっている。一昔前と比べ、路上に捨てられるゴミの量は相当減っている。けれども、大型小型の様々なゴミが捨てられていることに変わりはない。

『ごみと暮らしの社会学』を出した梅川由紀さんは、ゴミの歴史に触れている。江戸時代から明治時代中期について、彼女は「ごみの収集は民間の処理業者が実施し、行政はその統制・監視を担っていた。江戸時代初期、江戸の町の人々がごみを捨てていたのは、近所の堀・川・空き地などだった。」という。堀や川に捨てられたゴミは船の通行の妨げになり、空き地のごみは防火の妨げになり「幕府は、そこにごみを捨てることを禁止する町触れを出した。」

環境を改善し、抜本的な清掃事業改革が必要になり、「一九〇〇年に汚物清掃法が制定された。」ポイントは2つで「市直営の原則」と「焼却処理の原則」と梅川さんは書く。

まだこの項は国や地方自治体の関与は乏しく、市や町村で対応していたといわれる。

「一九三〇年の汚物清掃法の改正によって、ごみの焼却が義務づけられることになった。」

梅川さんの言葉の中に、戦争が起これば普通の暮らしが難しくなる状況が描かれている。

戦後は敗戦によってモノが不足した時代で、行政の対応とともに、ゴミ屋にバタ屋が活躍した時代である。勝手口で主婦と業者が、要らない物やお金になる物についての会話が生まれた。その後の高度経済成長で大量のゴミが発生し、その対応のために生まれた機械的・無機質なゴミ収集とは違い、人間的な付き合いが介在していた、と梅川さんは書いている。

ゴミの歴史を学ぶことは大変だけれど、悪くない、と思う。



→ごみと暮らしの社会学

著・梅川由紀

(青弓社)